

犯罪者の共感性と対人認知傾向の研究  
～社会的視点取得の観点からの一考察～  
保健医療学専攻 医療福祉心理学分野  
平間さゆり

キーワード：犯罪者 共感性 社会的視点取得 対人認知 鳥獣戯画テスト

【研究の背景】掲載

平成 28 年度犯罪白書の報告では、再非行少年と再犯成人は過去 30 年間に両者とも増加している。再犯率の減少を目指し、刑事施設や社会内処遇において、攻撃性を低減させるための対応が求められている。犯罪学研究では、直接的な対人攻撃行動に出るような攻撃性の高い者は、共感性の認知的側面と情緒的側面とがアンバランスな状態にあり、そこに外部からの何らかの刺激が加わることによって、比較的簡単に、他者を傷つけるような犯罪行動に至っている可能性があるとして報告されている。これは、共感性における構成要素のバランスの偏りが要因の 1 つであるとする考え方である。以前は攻撃性の低減と共感性の関連についての研究がなされていたが、共感性には構成要素として、共感的関心、個人的苦痛、ファンタジー、視点取得の下位分類があり、構成要素のバランスに加え、相手の立場に立って物事を考える能力である視点取得が、攻撃性を低減すると報告されるようになった。

一方、犯罪者処遇では、環境や人格傾向などによる攻撃性の問題により共感性自体が育たず、対人関係に問題を抱えた非行少年に、SST（社会生活に必要な常識的な行動や対人関係の訓練）を実施しても対人スキルの向上があまりみられないと報告されている。そのため、外面的な対人スキルの改善に焦点を絞った SST ではなく、内面的な共感性と共に対人スキルを高める訓練を社会適応訓練講座等においてグループセッションとして取り組んでいる。

共感性、及び視点取得は、矯正教育や処遇において重要とされているが、再犯率の高い成人犯罪者における共感性及び視点取得の研究は少ない。さらに、成人犯罪者と一般成人の共感性や視点取得の比較研究はないことから、犯罪者と一般成人における共感性の構成要素の差異や、社会性という観点から、他者の立場に立って物事を考えた対人認知や対人関係とされている社会的視点取得の差異を検討する事は、犯罪行動および攻撃性の低減にとって有用と考えられる。しかしながら、成人における社会的視点取得を測定する尺度は現在ない。

高次脳機能検査として開発され、対人関係や共感性の測定にも用いられている鳥獣戯画テストは、社会的視点取得を測定する尺度のアルメニア課題(中学生版)と関連性が示されている。鳥獣戯画テストを用いてその差異を測ることは、成人における社会的視点取得の測定尺度として有用性の検討にも貢献すると考えられる。これらから、得られた知見が矯正教育・処遇プログラムにおける心理教育や認知的教育の一助となる事を目指し本研究を計画する。

【目的】

犯罪者と一般成人において、共感性の構成要素と社会的視点取得及び対人認知傾向の差異を明らかにし、犯罪者の対人認知傾向が共感性と社会的視点取得にどのように関連するかについて検討する。

## 【方法】

調査対象：犯罪者（男女）33名⇒有効回答14名、一般成人（男女）128名⇒有効回答57名

調査方法：質問紙調査

多次元共感性尺度（登張,2003） 30項目5件法

鳥獣戯画テスト（簗下,2004） 図版3枚（二者・三者・集団関係）に主人公・相

手側の2通りの立場で話を作成させる（全6話）

分析方法：量的分析、質的分析（鳥獣戯画テストの話を臨床心理士2名の協議により分析）

## 【倫理上の配慮】

研究へのバイアスを配慮した上で調査の意義についての説明をし、調査は強制ではなく不利益はないことを伝えた。また、回答用紙に同意書も添付し調査協力者に後日回答と同意書を郵送してもらった。（本研究は、本大学院の倫理審査を受けたものであり、利益相反はない。）

## 【結果と考察】

共感性の構成要素については、犯罪者と一般成人の構成要素それぞれをt検定により検討すると、有意に差異がみられたのは「個人的苦痛」( $t(70)=-2.51, p<.05$ )のみであった。よって、共感性は経験により発達していくものであることから、「共感的関心」、「ファンタジー」、「視点取得」は一般成人と同様な発達をしている可能性があるかと推測された。一方、犯罪者は、何らかの攻撃性を持ち、感情制御が苦手なため犯罪行動に至る傾向にある。よって、他者の苦痛や不安を自分のことのように感じて、感情が制御できず自身も苦痛で不安になる「個人的苦痛」が高かったと考えられた。

一方、「社会的視点取得」については、鳥獣戯画テストに表現された社会的視点取得傾向を数値化し、犯罪者と一般成人に差異があるかをウィルコクソン順位和検定で検討した。その結果、両者には有意に差異があり( $W=605.5, p<.01$ )、適応的な社会生活はある程度できるが、価値観・認知に偏りがあり、欲求の制御に乏しく、客観的に他者の立場に立って物事を捉えられない犯罪者は、社会への適応と不適応が混在するため「社会的視点取得」が一般成人よりも低いと推測された。

次に、対人認知傾向については、図版中の対人関係を「何者で認知して何者の関係性を表現できたか」、「対人関係を肯定、否定、困難、肯定+否定・困難場面のどれで表現していたか」についてマクネマー検定と $\chi^2$ 検定で検討し、「話の特徴的表現」については質的に分析した。その結果、犯罪者は一般成人と同様に主人公側で認知した数のまま相手側でもその関係性を表現できていた。また、犯罪者は一般成人よりも肯定的な表現が少なく、困難場面の表現は犯罪者の方が多く、肯定+否定・困難の表現は、犯罪者の方が一般成人よりも少ない傾向にあった。

一方、話の特徴的な表現では、各図版共に両者は、図版の絵柄を率直に認知し日常の経験を連想させる事柄を多く表現していた。また、一般成人の方が良好な対人関係を表現し、犯罪者は極端に否定的な表現をして道徳や合理性などの社会的な対人関係が表現されないという差異がみられた。

犯罪者の話の特徴から、安定した状況ではある程度適切な認知をし、社会常識的で協調的な対応を適切にとれる側面を持つが、複雑な状況では相反する認知を統合できず否定的で疑いやしく極端で一面的な認知をする傾向にあると考えられた。

これらの結果により、犯罪者の適応的な側面と、否定的で極端な認知により猜疑的で主観的になる不適応な対人認知の傾向は、共感性の構成要素である個人的苦痛のみを高め、社会的視点取得の能力を低下させる要因の1つになると考えられた。